特30
704

版新

天理教與佛教

全

天理教を信ぜる理由
教祖の爲人を論して
現今の佛教を辨ず
身は是れ神の借り物よ
東洋の形勢を論じて
我日本の國憲に及ふ
母の恩
父の恩

014452-000-4

特30-704

天理教与仏教

真木　天涯／述

M31
ABB-0830

特30三
704

友人某此書を見て歎して曰く、君の辯壯烈著く鬼神を追ひ深沈善く鐵馬を哭かしむるの妙あるを雖其著書を見るに未曾て大家の題字又は紙文のなきは奈何予笑て曰く表は虎皮の文の如く内は錦袋の糞に同しき者予の曾て取らさる所且つ　教祖の御言葉に萬代の世界二列見晴せど心のわかりた者はない果して然は世に所謂學者大家我に於て何かあらん然とも是れ唯予の氣慨を陳るのみ本書の如きは昨冬以來大阪府和歌山縣等布教

の際演說せるを某人の筆記に掛る者素より著述して大方に示すが如きは予が素志に非すと、雖這の般書肆の强請に依り止むを得す茲に及ぶ讀者幸に恕せよ

戊戌の春御本部節會の日豆腐屋樓上に識す

天涯散士

◎天理教を信する理由

元來私は佛教を信仰し又基督教をも研究せり、分け登る麓の道は多けれと仝じ高根の月を見る哉、神道佛教基督教其名目こそ異なれ國家の秩序を保ち社會の安寧を維持し人類に幸福を與へ則ち人と神と相接近せしむると云點は大同小異なり共に一日も社會に無くてならぬ者で御座い舛、然るに今私が佛耶を捨てゝ殊更神道を信仰する所以は如何と云に、云迄もなく佛耶は外國の教へなれど神道は我國固有の宗教なればなり、假令ば萬國交際の今日國王と云へは何れの國王にも私は敬禮を致し舛、去れど我國の天皇陛下に對し奉ては層一層深厚なる敬禮を盡し舛否寧我天皇陛下の御爲には身命を犧牲に供するも又敢て辭せさるなり何となれは我々臣民を愛し玉ふ事我天皇陛下に過ぎ玉ふ國王は他に在されはなり、或時の御製にも古への歷史見る度に思ふ哉朕か治る國は如何にと畏も我皇は秋の夜長の徒然に古の歷史を繙き世の治亂興廢を御覽ある中にも天智天皇は秋田の苅穂の庵

の苦をあらみ我衣手は露に濡れつゝ　と天高く冷風塞き秋きの夜に温袍を纏ひたる賤の男が竹の柱に蔦の家根而も霜に凍へ風に吹かれ我衣手は露に濡れつゝ鳴子を引て稲に害爲す兎や鹿抔を追ひ拂ひつゝある百姓の事を想ひ遣り給ひては本に哀れ憐なき者よと折節錦の御袖を絞り玉ふ事の有りとかや、且は　仁德天皇には風すき雨もる宮殿に玉座を占められ御衣は千切れ千切れに成るをも厭はせられず民の疾苦を愍み玉ひて三年の間租稅を赦され給ひて、高き臺に登りて見れば煙り立つ民の釜戸は賑ひにけり、嗚呼　諸冊二尊國を創め玉ひてより　天照大神瓊々義尊去ては神武天皇より以來皇統連綿として斯る仁君のみ君臨し玉ひて明治の今日に到迄神代は數十万年人皇は二千五百有餘年其間　武烈雄略帝の如き荒々敷御方は御坐しませど多くは仁君のみなりき、去れど天災地變且は戰爭等の有る在れば皷腹擊壤と歡びし民もあれば塗炭の苦に陷りて悲歎の涙に咽びし民も有るならん就ては今朕が治る國民の今日此頃の消息は如何開港貿易萬國交際の新日本隨て經費も多端事務も

復雜民の難義も嘸かしと、雨の旦た風の夕べ我々兄弟の爲めに叡慮を惱まし給ふに非すや　其れ世界は廣し國王は多し去れど我々兄弟を斯迄愛し給ふ國王は果して何處に在る乎、之を思へは諸君や我々は身を粉にしても　皇恩に酬ひ奉るの赤心が無れば成りますまい、偖て此の　天皇陛下の御先祖なる十柱の神即ち　天理王尊の聖靈を感じ給ひたる敎祖　美喜神孃曾て我々に示して　曰く汝等謹而神の御言葉を拜聽せよ決て汝等身の爲に惡き事は云はぬぞよ、夫れ汝等の住む世界は神の造りし者にして汝等の身躰も亦神の賜者に非すや恩を受て恩に報さるは畜生に均し汝等宜く力を神と國との爲に致せ其身を淵ぎ其心を淸め國の爲に犧牲となり神の爲に供者となれ之れ人間が神と國に對するの勤めなり然は神は汝等の陰となり陽となりて一生を守り死ば高天が原とて神の御國に導き給ぞよ汝等寸毫も我言葉を疑勿れ我言葉は即ち神の御言葉なればなり汝等敢て輕薄なる學者と爲て神を疑ふ勿れ信仰の眞心無くんば神に接近事能はざればなり　神の道は信すれば幸となり謗すれば禍

○天理敎を信ずる理由

となる論より證據目に物を見するぞよと到る所靈驗顯著なり、其れ宗教は多し教祖又多し去れど純粹の日本人にして純粹我々の先祖たる　國常立尊より面足愼根乃至諸冊二尊の十柱の神の御道を斯も親切に斯も丁寧に說き諭されたる者は果して他に在る乎、嗚呼我々兄弟の者は身を粉にしても此の神の御恩と教祖の御情けには報ひさる可らざるなり、其れ如斯理由わるを以て私は佛教よりも基督教よりも一層深く信仰する所以で御座い舛、然に私は茲に至て神典教祖幷に諸君に向て懺悔すると同時に母の恩を喜ばねばならぬ事が有舛、私は始め申上る通り佛教信者にして神道の方は餘り意に懸け無かつたので有舛、所が私の母が屢信仰せよと勸めましたれど風に柳と受流にして居りました、折節母は傳染病にて避病院に擔ぎ込れました田舍の事故萬事不整頓勝にて私が之を介抱するにも小家掛の下土間の上薦の中にもぐり込と云樣な次第なりき如何した事か撈藥の功能も顯れず牛乳葡萄酒鷄卵の類を以て元氣を附れど身躰は次第に衰弱に及び喘々焉として死に垂んとし出

の樣な息を突きもて母は南無天理王尊假令壽命は無くとも暫く妾が命を延べ給へと祈りて居りました、所か不思議や母は稍元氣を回復し二十日程の中に病氣は全快し避病院よりして實家に歸りましたが、悲哉病后食物の適度を失せし故か定命逃れ難き故か遂に六十日の後遂に死亡しました、其死ぬる今端はのきわに臨て母は私を枕下に招き確と私の手を握り可憐の我子勇一よ「幼名」最早今生の暇ぞよ希ば母が最後の一言を聞てたべ其許は隨分両親に孝行「親の慈名」なりしが今は母の失せぬれば後とには老年の父上一人今迄二人に盡せし孝を一に纏て父上の御身を見參せよ、二には母か兼々說諭せし神の御道を忘れてなし給ふな今迄其方が母の勸めを聞ざりしは返へす返へすも一生の憾みぞよ之が冥土の障りぞよ死ぬる母を少しでも不憫と思ふ心の有るなれば死て後の追善供養はせず其神の御道を信仰して以て御恩報じに之を世に弘めてよ父の道三年改めざるを孝と云迫めては一二年なりとも斯道の爲に盡してよとほろりと一滴の熱涙私の掌上に、嗚呼諸君よ今に此手が熱ひ樣に思

はれ舛、實に私は其時よりして神の御道に耳を傾ふ樣に成たので御座り舛、其後堺支教會長平野辰次郎先生より提撕薫陶に預り遂に今日の境遇に成たので御座り舛依て私は身を殺しても　神の御慈悲と母の情けと師匠平野先生の恩に報はねば成らぬので有舛、其所で皆さんは今迄神樣の事は度々諸先生方より御教訓に預りたで有りましよから今宵は聊か母の恩を說て皆さんの清耳を濟さんとす併し餘り時間が長くなりましたで一寸一服しまして後刻御話を申しましやう

◎教祖の爲人を論して現今の佛教を辨す

十五世紀の始め佛蘭西國王、チヤールス、六世發狂してより國内大に亂れ、バルガンギー　ラルレアン、両黨は恰も我自由黨與進步黨の如くに毫も國家の利害休戚を顧ず　徒に兄弟牆に相鬩ぎ爲に其隙を窺ひ英國の乘ずる所となり、遂に國を賣り社稷を覆し命脈の絶へんとすること縷絲の如く眞に間一髮の塲合に瀕し、此時早く彼時遲く赫灼として電光を放ち赫然として天の一方より下る者あり、是ぞ身に

戎衣を被り腰に劒を帶ひ悠然として白馬に跨り數萬の軍人を睥睨して我は是れ天使なり我は是れ神孃なり今佛國に降臨して汝等臣民を救ふ者なりと揚言し咽嗌叱吒破竹の勢を以て英軍を掃蕩し、チヤールス、七世をして羅因河畔　メイムの地に即位の式を行はしめたる者は、實に　ミユズ河畔旅店の少婢而も驛馬を使役するを業とせるの賤婦　ジヨアンダークと云ふ者で有ませんか　飜て今我日本を見るに政府は議員を買收したりと云ひ　議員は節操を變して政府に買れたりと云ひ、臺灣の官吏が監守盜を犯したりと云ひ、娼妓を妾にしたりと云ひ、判事の收賄撿事の詐欺、彼と云ひ此と云ひ妖雲濛々天地慘憺たる悲劇を演じ、又佛教の如きは釋迦が天眼通を以て末法萬年には佛教地を拂て去らんと明言せられたるが如く、果して今日の佛教は其外面を見れは亂暴狼籍至らさる無く、其裏面を窺へは因循姑息醜猥汚濁云ふに忍ざる者わり、其他基督教の如きは風俗與國體を害して憚からず、普通の神道ば無氣無力爲す有るに足らざるの慨あり　而も神官僧侶相爭ひ耶蘇其隙に乘せん

○教祖の爲人を論して現今の佛教を辨す

とし、恰も佛蘭西のバルガンヂー、アルレアン両黨の爭に英國の乘じたるが如き有樣で御座い舛、此時に當り咽咤吒破竹の勢を以て這の騷亂を鎭靜せんとする神孃、ジョアン、となる者は孰れぞ、吾人は實に其のジョアンを喝望する事大旱の雲霓も啻ならざるなり、嗚呼國亂て忠臣顯れ其救ふ可ざるに至ては神必ず降臨す、今や國亂て忠臣を思ひ危急存亡救ふ可らさるの場合故天必ず神使を降さずんは非す、其神使とは蓋し天理教祖　中山美支賀名眞道彌廣芦知女命に御座しまさすや　何を以て然か云ふ謂く教祖は燃るが如き信仰を以て神に事へ、燃るが如き愛を以て人を救け、燃るが如き熱神を以て道を弘め、自ら神の使と名乘り、自ら國の柱と信じ言行一致して以て人を塗炭の苦より救ひ上げ僅に口を開けば以て百萬の信者を招き左右の手は以て二百萬の信者を抑へ、両足は以て二百萬の信者を踏み、僅々數十年間にして日本全國に於て五百萬の信仰家を得て以て優に四千萬の佛教家と相對す其業の偉大速成なる古往今來東西洋に渉て未曾有の盛舉なりと云ねばなりますまい

古人も千人に倍するの能ある者之を英雄と云ひ萬人に倍するの力ある者之を豪傑と唱へ豪傑に倍するの能力ある者之を聖人と云ふとかや、去れば彼の耶蘇の二億以上の信徒を從へ、釋迦の五億以上の男女を卒る者無論之を世界の大聖人と稱るが如に我教祖も野蠻草昧の世に出ずして文明の最高點に達せんとする十九世紀の今日世界の根元なる日の本に於て而も日本の始めなる大和の國に生れ給ひて　猶も卑き百姓の身を以て目に一丁字を知らざる無學の身を以て　嶄然として頭角を現はし數十万の智者學者を尻目に掛け數十万の神官僧侶を睥睨し　萬代の世界一列見晴せど心ねの分りた者はない、其の善や說て聞した事はない知らぬは無理ではないはいな、此の譯を委く聞た事なれば如何な者でも戀しなる、「御神集歌」程に我慢我見を放棄して我軍門に降伏して現在未來共に神の救助を受けよと揚言し　右から左り不可思議なる神力を現はして今や日本全國は西は筑紫の果てより東は青森北は北海道に至る迄眞に山村僻地津々浦々到處として天理教會所の在らさるなく而も其普請は

開敎日猶浅にも拘はらす小は二三百金より大は數十万金に到る　是を之れ天使なり神孃なり大聖人の力なりと云はずして將た何の力ぞ、日本のジョアンは豈に我敎祖眞道彌廣言知女命に御座しまさすや、人或は敎祖は百姓なり無學なりと笑もの

あり　抑も學問の要は唯放心を修るのみ人の尊卑は事の成不にあり、世には貴族にして無學なるあり　學者にして放蕩無頼なるあり、貴族與學者社會に於て何の必用かある　請見よ僧の日蓮を彼は是れ穢多の子と云ふに非すや、請見よ太閤秀吉を彼れ將た何の學問かある　且つ見よ耶蘇基督を彼は是れ姦夫の子にして大工を職とする者に非ずや、猶又先に所謂佛のジョアンは王公の裔か將た貴族の種か實に旅店の下婢にして又驛馬を使役するを業とせるの賤婦に非すや、要は唯德と實權を具るに在るのみ、苟も德と實權を具ふる者は母體に在りて既に天下に王たり　應神天皇是なり、德と實權を具せさる者は百歳にして猶人の臣僕なり、武内宿禰是なり、茲一番細思熟考すべき所なり何ぞ妄に他を誹謗するの酷き、猶其の笑者にして果し

て　敎祖か爲せし百分の一の業を爲し得べしと思へるか、乞食婆々か大家の奥方を嘲り　盗犬か諸侯の行列に吠へ付と何そ撰ばん眞に憐む可き者にこそ、斯る輩に限り自己の無學と卑賤を措て　徒に辯を弄して天理敎徒は無學なり痴呆なり青瓢蕈なりと罵詈して止す　然り或は我敎徒に愚夫愚婦多からん　然ども愚夫愚婦は何ぞ獨り我敎徒に限らん、日本四千五百萬の人民中五百萬の敎徒を除き其他は　悉く智者學者紳士豪商のみとするか、其他支那印度歐米各國にある耶蘇回々敎婆羅門敎徒の類は皆　悉く智者學者紳士豪商のみと思へるか非蛙大海を見すとは斯る輩をや云ふならむ、且つ彼輩未　宗敎の何者たるを知らさるなり、試に思へ世に病人あつて始て醫藥の必要を感せしを、世に愚夫愚婦あつて始て宗敎の必要なるを、敎祖曾て曰く我は智者學者を敎るに非す唯迷る者の爲に道標たらむのみと、基督云はすや我の此の世に來る義者の爲に非す彼の亡びたる者を救はむが爲めなりと、其他佛敎婆羅門敎等皆然らざるはなし、却て是れ宗敎の光榮特色とする所愚夫愚婦養成の專賣特

○敎祖の爲人を論して現今の佛敎を辨す

許は天理教の占むる所なりと云も敢て辞せざる次第で有舛、併し斯く言はゞ智者學者は皆天理教を信するの必要なきかと云ふに否々智者學者こそ猶更我教の厄介を煩はさねば成らぬのて有り舛、耶蘇も學者とパリサイの人を惡む、又謂く災ひなる哉僞善者よ汝は白く塗れる墓の如く面は美麗なりと雖中は累々として骨みてり、と其れ世に有そふに見へても無のは金、無さそふに見へても有るのは借財とは人の事には非ずして斯く申す私が御引請申し、有そふに見へても無いのは誠と、無さそうに見へても有のは罪よ、而して其の巧に外面を裝ふて人を欺きたぶらかす者は農業を爲す者三文商ひする者車を輓く者には絶へて尠くして、却て智者學者紳士豪商と自任し高帽高く天を衝き金時計を胸間に閃かし大道狹しと我者顔に横行濶歩する者に多ひので有舛、元來私は佛教信者にして數十年來佛教の學科を修め彼の大學林とやらの二三級は卒業もして一時は大家とやら學者やらに誤認され某雜誌を發刊し某倶樂部の部長に撰擧せられた事も有り舛たか其故畏れ多き事ながら天理教の如

きは淺薄取るに足らずと爲し曾て齒牙にも掛ざりし程なりしに今は還て斯道の爲には討死するも敢て辞せざる程の熱神家になりしは何故かと云ふに、佛教は理論は高尚なるも實行に難く、天理教は教理は卑近なるも實行に易けれはなり、則ち我教徒には世に所謂智者學者こそ少けれ眞の人間に乏からす佛教には智者學者こそ多けれ眞の人間が尠ひので有舛、私し曾て我本部より參詣を致しました其日は恰好十月廿六日にて大祭日で有りし故全國より集ひ來る老若男女は無量數十万も有りき、私は門前の豆腐屋となん云へる旅宿に泊りしに殆ど五六百と云ふ多人數と同宿せし事故隨分雜沓はしたるも五日間滞在中毫も家具食物の不足を聞す、金錢の間違を聞かす、喧嘩口論を聞す、唯何れの室も和氣藹々として神德談のみを以て充されたるには實に感伏の外なかりき、殊に驚きしは各自旅宿を出立の際皆々勝手に宿泊料を支拂たるの一事なり、譬へば客より私は三日間御世話に成りましたがと云へば、店の番頭は其れじや幾十錢頂戴しますと云ひ、又私は五日間滞在は致しましたが食事

○教祖の爲人を論して現今の佛教を辨す

は五度より致しませんと云へは其れじや何十錢御貰ひ申せば宜しひと云ふの類で御座い舛、伊勢高野本願寺四國と各靈場巡拜者の定宿の旅館の佞辯奸黠を逞する者多き今日此頃、獨り我天理教に於て這の好摸範を見る、本より　教祖の御德に感染する所にして從西從東如雲如雨に集ひ來る幾百萬の信男信女が曾て一人も旅宿を欺きれる者なきを以て遂に此の美風を吹す樣に成りし者と思はれ舛　縱使教理は卑近にもせよ純粹我々の祖先に坐し坐す　十柱の大神を尊崇し　八の塵埃を拂て誠一筋に　神樣を念せよと云ふ單純無垢潔白なる　教祖の御教訓が斯く迄に功力ありとせは、　私は七千有餘の經卷八萬四千の法門を捨て此の御道を信仰する又實に道理上止を得ざる事と信じて居るので御座い舛、元來事は言に易く　行に難き者なり言ふ可くして行ひ難き者は寧ろ言はざるを善しとす、況や言ひ難く知り難く行ひ難き者は殆ど書に書た餅と一般畢竟世の中に必要は有るまいかと思ふ、彼の佛教には眞如緣起となん申して極高尙な說がありて、此の世の中の千差萬別の現象は眞如平

等なる理體から假に現れて居るので其の理體に冥合する眞智より照らせば、世の中には正邪も無ければ曲直も無い男女の身相も無れば美醜好惡も無い所謂煩惱即菩提生死即涅槃娑婆即寂光土、其理に契達する之を悟と云ひ佛と云ふ、其理に迷ふを凡夫と云ひ衆生と云ひ地獄餓鬼畜生修羅人天とて六趣に輪回すと云ふ、又眞言宗には六大緣起を立て六大無礙常瑜迦四種曼荼各不離三密加持速疾顯重々諦綱名即身と云ひ、華嚴の十玄六相、天台の四教五時等と中々高尙な說き方なれど所謂言ひ難く知り難く行ひ難き教故へ古來眞如の妙理を悟りて佛になり六大の原理を究めて即身に成佛したる者はおろか、四教五時十玄六相の名字だも明に知りたる者は少なしとやら聞き及ぶ、其故今日耶蘇は邪教じや天理は國賊なりと恐號し廻る僧侶自身すら天理耶蘇の教理は勿論自分が宗旨の基礎たる諸經典を歷史的に研究した事も無ければ又研究すれはとて釋迦の入滅が何つやら其高尙なりと氣張る所の大乘教が佛說やら非佛說やら譯りもせねば知りもせず、依て實地布教するに當ても

○教祖の爲人を論して現今の佛教を辨す

眞如六大十如是の如きは自ら知らぬを以て言ふ由もなく、又知て居ればとて之を普通人に說けば猶に小判陳粉漢更に功能なき故止を得ず論語小學等より拔出して、君に忠親に孝世に交るに信義を以てせよ否れば地獄に墮る佛は心地觀經や父母恩重經等に斯く說かれたり抔と云に過きず、去れば之を虛心平氣に聞く時は儒敎やら基督敎やら佛敎の小乘やら人天敎やらの種々の混合物博覽會としか見へませんので御座び舛、其故現時佛敎の勢力と云者は甚微弱にして孤城落日風前の燈火と云悲境に沈み、凡ての宗敎的事業は基督敎に奪はれ、眞實信仰家としては我敎徒に奪はれ、數十万の寺院數十万の僧侶四千萬の信者ありと雖漸く遺傳習慣の糸に繫がれ僅に命脈を保ち居るのみと云も敢て過言では有舛まい、斯る次第故偶ま頭を出す時は、冥加に餘る、上を見な、身の程を知れ、勿体ない、何の因果で、未來が恐しい等、の卑寵無氣力なる佛敎普通語が原因となりて痴情痴話の小說を演出し、艶容女舞衣となりては彼の不都合なる半七が操直さ於園に宛てし殘し文を見るに、今迄

すげのふ致せしは更々嫌では無く候得共三勝とはそもじの見へぬ先きからの馴染にて予迄設けし中に候得ば互に退離も成難く其故疎遠に打過參せ候併し夫婦は二世と申事も候得ば未來は必す夫婦にて候、於園は一目見るよりおふこりや誠か半七さんと、又彼の於染久松の芝居を見に於美津と云へる娘は是非久松の妻とせざる可らざるに於染との中を切り難くして哀れにも於美津は遂に尼となる、其時の言葉に迚も此世は無い縁でもせめて未來は云云此外世間一般親の目を偸み人目を忍び其所の軒の下此所の垣根塀を越へ溝を渡り掛落退走の末木に縋れ水に投じ新聞に書れ數へ歌に唄れ親兄弟の名義迄を汚すに至るは其源淨土眞宗の因緣說敎の結果厭離穢土欣求淨土と斯く日月の照らし給ふ日本國、允文允武なる　天皇陛下の明けく安らかに治め給ふ聞薩原瑞穗の國を忌み嫌て早く西方極樂に往生したしと云ふの念慮より惜ら名譽と身命を擲つに到る嗚呼悲哉猶又各宗僧侶の品行に付ては人身攻擊に渉るの嫌あるを以て暫く之を措き其一般信徒の心得を見に多くは佛の何たるを知ら

○敎祖の爲人を論して現今の佛敎を辨す

す安心立命の何たるも知らす唯地獄の沙汰も金次第の格言を守り母の病氣に小札何許の護摩祈禱父の病氣ゑ大札何許の御禱祈妻の病氣に二夜三日正札付厘毛引なしの札守を買ひ其死亡するに及ては居士大姉の法名に幾許院號付には幾許と賣買す嗚呼之が賣主なる僧侶は寺院維持の方便なれば敢て罪なからむも之を眞實に默從信仰する者こそ釋迦が所謂可憐の衆生にこそ要するに佛敎は高きは眞如六大十玄六相と云類にして言ひ難く知り難く行ひ難きの敎へにして、卑きは浮土眞宗の因緣談痴話痴情の小說に終る、私が空理空論の佛敎を捨て實利實益の天理敎を取る實に偶然に非るなり、否敎祖が卑き百姓の身を以て目に一丁字を知ざる無學の身を以て奮然蹴起千軍萬馬を蹂躙し富士山頂高く白馬を跳らして世界各國を掌上に振廻さんとす嗚呼國亂て忠臣顯れ其救可らざるに及ては神必ず降臨す　敎祖は其神に非る乎、狂と呼び痴と笑ふ人の評に任す　私は唯神與國との爲に死なん

◎身は是れ神の借り物よ

未だ御道を信仰せざる者は、敎會所の門前より内を眺め、天理敎天理敎と名こそ立派なれ其實愚痴暗昧の集合所病人無學者の縱覽所なり抔と惡口雜言罵詈讒謗して止まず、眞に可憐の者にこそ、總て物事は何によらす初より終り迄果遂るが肝要にて、初めばかりを聞かじり見かじりして、充分其の味を知らずして兎角の評を爲すは恰も芝居の三番叟を觀て直に三段目に斷案を下して阿房らしひ馬鹿らしひモー歸らふと云ふに仝じき者にして其人の不幸此上もなき事で御座ひ舛、昔し花園左大臣の御邸、新規に召抱に成りたる若黨あり能は歌よみと聞ゆ、折しも天高く月淸き秋の夜に左大臣南殿に出で給ひて月觀の宴を催されけるに庭前の叢の内に促織蟲の鳴きければ彼の歌讀の若黨を招き促織蟲を詠じて一首仕れと御意あらせられた、左右に侍き傍ふ女中は奇維星の如に居并べる其前に彼の男は畏まりて「青柳の一」と初の句を詠み出せば、女中遠之を聞き如何に頓馬な者なればとて秋の最中に青柳とは青柳は是れ春の者ならずやと思ひてや一同にどつと笑ひけれど、若黨は愧る色も

○身は是れ神の借り物よ

なく、青柳の綠の糸をくりをきて夏經て秋は促織そ鳴く、と讀み終りて頭を下げけれは、左大臣深く感賞し玉ひて即座に萩の摸容を織たる垂衣を賜りた初に嘲笑せし女中共大いに赤面せしとなん、凡て物事は如斯な者なれは始終を詳にして後にこそ是非の評をも爲す可けれ、否れば却て其者の品位價直を墮すに至る愼む可き者で御座ひ舛、去れど蕩々たる天下幾千萬の人殆ど皆此類にして、世に神も佛も有る者か天は是れ吾人人間の天なり地は是れ吾人人間の地なり、屋敗は是れ我屋敗なり家は是れ我家なり五躰は是れ我の五躰なり、天上天下唯我獨尊なり神佛我に於て何の要かある、且其れ人は人我は我四海兄弟とは虛の皮然を汝何ぞ我境界を浸し汝何ぞ我物を奪やと眼に朱を濺ぎ口角泡を飛ばして以て相爭ひ親は兒を訴ひ兒は親を追ひ兄弟姉妹牆に相鬩ぎ時に或は一場の修羅道を出現するに至る嗚呼悲哉、抑蒼々として高く際涯なきもの之を天と云、天は矢張天にして人間の所有に非す、何と者我に一言の辭もなくして日月星震は勝手氣儘に運行し雲覆ひ電光り雷鳴り雨降り鳶

烏雀遠慮會釋のあれはこそ穢多乞食は本より大臣參議の頭上より或は屎尿を下して敢て憚からさるあり、然は天は矢張天にして日月星震雲雨雷電鳶烏雀等の一大公園場と云可くも我々人間の所有物とは云へますまひ、然ば吾人の足下にある地球は我の所有ならむと思者あらむ、去れど地球は矢張地球にして人間の所有に非す、若果して人間の所有なれは能我命を奉じ思が儘に運轉を爲し得べき者なれど、却々人間の命令は愚か時に或は神佛の命令をも拒み雷火事親爺三十日の借錢取の其ならで最も恐る可き地震海嘯となり時に尾濃の震災となりては數千人の命を奪ひ三陸の海嘯となりては田園を掠め家屋を流し一万有餘の人を殺し十万有餘の人をして飢餓に逼らしむ、故に地球は地球として措可し我所有抔と愛する時は却て飼犬に手を咬る丶事あらむ呵呵、然は稅金を納めつ丶ある家敷こそ所有なりと、然り所有物なり但し一分のみ全分の所有とは云ませむ、試に見られよ灼々たる園中の花爾々と蝶の戯る丶あれは意地惡雀の來りて之を追あり、鬱々たる翠の松反哺の孝を盡さむと

○身は是れ神の借り物よ

するの烏われは忽ち鷹の飛來て之を妨るあり、灌端に蛙の跳るあれは叢の中より蛇の睨ふあり嗚呼憂るさの世の中や、故に家敗は矢張家敗なり自由にならねば所有物とは云へませむ、然は間口二間奥行五間八疊幾間六疊幾間の此家屋は我所有なりと、然り所有なり但し一分のみ全分とは云へませむ、暮八時に明四時而も蒸すが如く燒が如に熱き夏の夜に蚊帳の破れより文文と蚊の飛來りて所撰ばす身を惱すさへ憂蠅に二階の上には鈍鎮頑と鼠の暴れ廻りて一夜として氣樂に寢られもせぬ本に儘ならぬ娑婆世界にこそと、斯く某處に於て演說し來る時飄然として塲の一隅より現れ出る者あり、是そ窈窕たる美婦人にして嬌然として花顏を破り赤き唇を伸べて予に謂て曰く、妾が眉は翠羽の如く肌は白雪の如く齒は貝を含めるが如く腰は素をつがねたるが如く丈は高からす底からす朱を施せは赤過る粉を施せは白過ぎる嗚呼眞個天然の美婦人なり而も一ひ笑は英雄の心事を蕩らかし二ひ笑ば金城鐵壁を傾け三ひ笑は天下を覆すの力あり嗚呼眞個絶世の佳人なり知らす是れ何人の所

有ぞや窈窕たる淑女は篤實溫厚なる君子の好逑なりと雖君子は君子淑女は淑女妾の身は是れ妾の所有物に非すやと意氣軒昂將に天を衝むとす、予も始はぞつとしたれど漸く氣を沈め徐に口を開て諭して曰く推參なり美婦人座せよ這の佳人我れ汝に告む、彼の徒に氣を高尙にし敢て身を塵埃に汚さすと雲の如く雨の如くに集ひ來る艶書をは蠅の如く虫の如くに見向もせさりし小野小町は如何、花の色は遷りにけりな徒に我身世に經る眺せしまに、と花の色の遷り變るを見て又自己が容色の衰へるを歎き悲みたりしが遂に墓なくも北邙一片の煙となりしに非や、猶又汝が身邊を見よ表は虎皮の文の如く裏は錦袋の囊に全く風呂に入らねは垢が附く垢の中より虫が湧く襟袢の襟には虱跳ると云の風情ならんや、去れば永く壽命を保ち得さるは勿論僅か五十年の短日月間五尺の身躰すら自由にする能はす自由に成らねは所有物とは云へさるなり汝敢て自惚を起す勿れ喝、哀れ絶世の佳人も面色土の如く苦笑して以て逃げ去りましたで御座ひ舛、嗚呼天地山川家屋敷五尺の

○身は是れ神の借り物よ

形骸に至迄自由にもならす所有物にもあらすとせは是將何人の所有に屬する者そ諸君請怪む勿れ是れそ則　天理王大神か苦辛經營の結果に成りし者にして吾人の身躰は　日月の惠を受け諸冊の二尊今の本部の甘露臺に於て造り出し玉へる者にして教祖が所謂世界は神の所有にして其中の人間は神の子である我々の躰は神の貸物てある故に可知世界も人も神の力を以ては自由に成る可きも人間の力を以ては兎ても自由に成らさるなり、然は諸君にして此道理を辨別し一舉一動悉く神の御心を以て心とし神の行を以て行とし喫茶喫飯悉く神の御陰なりと信し、鳶飛で天に到り魚躍て淵に入る悉く神の遊戯なりと悟り、面白や散る紅葉も咲花もをのずからなる神の御すがた、と諦念る時は禪に所謂月下の鵲鍬盤の雪人欠神欠神欠人欠彷髴として其間一髮を容れすと云の妙境に到達すべし、然し如斯は上流社會の談にして一文不通の者の爲には雲に梯橋窓より天容易に會得し難たければ特別に是れが捷徑を示さむ、教祖は無理な願はして呉な一筋心に成りて來ひ、と諭し玉ふ、

去れば我々愚昧の者は唯難有と云の一念と誠一念とを以て一筋に神を祈る時は現在未來共に神の御救けを得ること間違は有りませむ、既に神は未來をも救くる者なれば現在に於て凡ての福利を與へ或は難産を輕くし難病を癒が如きは者の數かは宿業所感業病難治と醫王も治すべからさる癩病ですら僅か一周間にして平癒せし者所々に散在し諸君も又既に知る所、癩病の如きは愚なこと死せし者すら蘇生せし者あり、是れ甚奇談なれは諸君請耳を澄して聽取われ、予が友人藤井某近頃印度より歸る、彼に就て錫蘭の事情を聞く、中に最も奇むべき神德談あり、謂く錫論の某市街に波羅門教の信者あり、夫婦の中に娘一人を設け、年は二八か二九からぬ、丹花の唇雲の鬢、揚貴妃に非れば、衣通姫、實に海魚落雁とも云可き美婦人ならは、両親の喜ひは無論縱令千金を擲とも一生の中彼が一顧を買はむものと心窃に春波に漂ものも多かりき、然るに諸行無常の世の習ひとて愍むべし一朝病に臥し、是生滅法の夕風に、花の貌は消せぬ、鷲峰山上明月澄み渉れど、濟ぬは父母の胸の

○身は是れ神の借り物よ

中、荒にあれ狂にくるひて亂れ髪、神も佛も無き者かと、前後正体哭き沈む、折節門訪一人の僧、亦も此僧は日本人、深く天理教を信仰する者なれど、旅行の不便を思ひてや、身を僧形にやつせし者、一夜の泊を頼みけるに、父母は涙に咽びつゝ、是そ天の與る所、希くは早く入りて娘の蘇生を祈りてよと、彼の僧は頭を搔き、這は飛てもなき所に出合せし者哉、回向と云へは南無阿彌陀佛位は知り居るも、蘇生と云ては詮術なし、去は云へ否む譯にも行かねばと、澁々と死者の間に入れは、這は亦も如何に艶麗なる其美貞、恍惚として醉るが如く、暫しは見とれて居たりしが又心を取直し熟ら見れは眞に絶世の佳人なり、幸ひ人間に生れた所詮には、斯る美人と枕席もがなと、情慾熾にして止み難く、不義不道とは知りなから、傍に人なきを幸ひ遂に獸欲をそ遂にける、實に淺間敷限りにこそ、然に彼れは心中何となく穩ならす、頻に氣の咎めて止まねば、狐鼠〳〵と影を陰して逃げ去りしが、門を出で、歩むこと五六丁にして、陰雲蒙々として天を掩ひ、霹靂として電光閃き、

身は粟々として歩行に堪す、遂に石上に腰を掛け、天を仰で歎して曰く、我れ如何なれは神の御教に背き斯る不義を逞せし、今神罰立處に顯れて我身は遂に五分裂にせられむ、嗚呼、天理王の大神、悪因悪果は理の當然死する我身は措まねど希ば尊靈の慈悲を以て彼の娘を救け玉へ、希は神の御力を以て我身を身代りにして彼が命を救け玉へと血涙を滴して祈を懸けしに、不思議や瞬時にして雷止み雲霽れ一天拭が如くになれり、茲に於て彼は身の安内を喜ひ猶死者の爲に祈らむと、後戻りして死者の門前に到りしに、娘は今復生れり生き歸れりと、家の内は大混雑、彼は餘りの事に打驚き其儘其處に倒れしが、夜の更るに隨ひて冷氣を感じ眼を覺し見れは四面寂として聲もなし、彼れは始て我に歸り、亦も昨夜の事は夢か現つか去ても不思議の事よと何處共なく歩を向けぬ、話變りて娘には其月より身重もになり月日を經るに隨て醫師も産婆も是れ正く懐胎なり、決して病の故にあらぬ由申にそ、親の驚きは言はむ方なく、本より知らぬ娘の濡れ衣、何時燥く其果てしなく哭く哭

○身は是れ神の借り物よ

く彷徨る奥山に紅葉踏別け啼鹿の聲哀れにも秋の末、玉なす男の兒は生れ出ぬ、見れば色黑けれど髮濃く何となく日本人と印度人との間の子らしく見へぬ、斯る程に月日に關守なく其子七才の時、以前の僧尋ね來り涙なからに既往の懺悔話、聞く娘は本より面親も或は怒り或は感じ、終に夫婦の契を結ばしめぬとなん、此一條の談話聞き去り聞來りて果して何の感かある、南人雪を夢みず、大聲又俚耳に入り難し無論不可思議なる神の境界、人智を以て疑念を懷くも無理には有らねど、予は右の事實は兎に角に、神の御力を以ては斯樣なることは朝飯前の事と思ふ、猶右に類せることは獨に於でも、有りたりと、今の監獄事務官小川滋次郎君が昨年萬國監獄會議より歸朝後某人への雜話の中に見受たりき、要するに我々信徒は何處迄も身は神の借物と信じ唯誠一筋に神を信する時は如何なる願望か可ざる冷煖自知、自ら行て見よ

◎東洋の形勢を論じて我日本の國憲に及ぶ

諸君は彼の緬甸が英國の爲めに討滅せられたる原因を御存知で有舛欠、予未だ詳に之を知るに由なしと雖、其外部より來る原因と云を聞くに、是より先き其隣國に印度と云大國をして英國に暴奪せられたる一事なりと云ふ、御承知の通りビルマは東洋の一少國にして人口も一千萬内外にして、其政治も東洋風の不行屆を極めたる至て微にたる國柄で有たので御座ひ舛、依て世界第一とも云べき英國の撲滅されたるは猶に虎提燈に撞鐘兎ても鈎合の合はぬ者なれは、敢へて怪む可きに非すと、雖、然れとも、英國とビルマは里程は殆ど六千里も隔て、而も之が討滅の爲に送りたる兵隊は前后概して六七萬以上と云ふ、然は斯る大軍を六千里もある所に向て容易に送り得べき欠、否却々六間敷のである、而るを容易に其兵を差向て以てビルマを討滅したる所以は、始め申上る通り印度と云ふ宏大なる土地人民を所有せしめたるを以て、いざ戰爭と云場合になると、英國は直に令を印度に下して、兵を送り食糧を送り彈藥を送り即ち人口一千萬に上らざる一少國と二億以上ある一大國との戰

爭故、何の苦もなくビルマは敗亡したので御座ひませよ

酬て今之を我日本に比較するに、日本の隣國は朝鮮と支那である、實に一葦水帶一寸手を伸せは達するの地で御座ひ舛、其の今朝鮮の形況は何で御座ひ舛、彼は嚮に日本の秀吉の爲に蹂躪され日本兵の過る所野に青色なしと之程に亂暴狼藉の悲劇を演せられたることとて、容易に國力を挽回致し難く、遂に今日に成ては東學黨の變亂となり日清の戰爭となり露國の干渉となり、今や財權と兵權は擧て露西亞の横奪する所となり、風前の燈火とは眞に朝鮮の事で有ませふ、次に支那に至ては日清戰爭の結果、多の將校と兵卒を失ひ臺灣を失ひ二億両の金を失ひ、而も老大清國尾大不振の浮名を立てらるゝ其上に、膠洲灣は獨逸に奪れ、旅順港は露西亞に云云せられんとし、英國復太連灣に據らんとし、手をもがれ足を斷たれ命瓜既に盡むとす、嗟呼清韓の危殆如斯とせは、唇破て齒寒し、我日本は之が爲め果して如何なる痛痒を感せんとする欠、本より日本とビルマは比較物に非と雖、西比利亞鐵道成

功の曉は歐洲より我日本に來るに僅に七日間を要すと云場合に際し、萬一歐洲の或強國と我日本と戰端を開く事ありとせは我の境遇は果して奈邊に屬する者そ、我々國民は豫め講究し措くべき問題ならすや、否今日既に之に對するの覺悟を極め措く可き者と思れます

偖て之に對するの覺悟、政治家は政治家としての議論あるべく、實業家は實業家としての議論あるべし、雖、吾人宗教家は宗教家としての議論なかる可らす　即ち吾人は國家百年の大計を案するに須く先づ我國民をして我國憲と國法を知らしむるに有りと思はれ舛、此説甚于遠に似たれとも、元來ビルマの亡ひ支那朝鮮の危き皆國憲國法の確立せさるに依る者と思はれ舛、ビルマと朝鮮は暫く措き試に支那を見られよ、支那と云國は始め三皇五帝文武周公と聖帝并び出でたりと雖悲哉我御國の如く萬世一系の皇統に非るが故に、英雄豪傑思ひ思に國王となりて暴威を振へり、其故現に今の清帝愛親覺羅氏の如きも、先の明帝を追ひ攘て帝王となりたる者

○東洋の形勢を論じて我日本の國憲に及ぶ

なれは明の遺民にして先帝に對して忠を盡さんとせんか今上に對して不忠となる、今上に對して忠を盡さんか先帝に對して不忠となる、其故彼等は事に臨て躊躇狼狽爲す所を知らず遂に他國の爲に凌辱せらるに至る嗚呼哀れなる哉

然に我日本は之に返して、畏も、天照皇大御神皇孫瓊二杵尊に、此國を讓り給ふ時、此豐葦原瑞穗國は我子孫の代々王位を踐む可き國汝瓊二杵の尊我皇位をば受續で天下をば平に安に治むべし天津寶祚の隆盛ならん事は天壤と共に限り無らん者そと詔勅れ三種神寶を授られ以て千代萬代の末掛て天位の御兆と成し給へり、此れそ日本の精神腦髓にして國體の淵源又實に茲に存すと云べし、而して我日本は建國二千五百有餘年來、皇統連綿として東海の表に卓然屹立して、大義は上に明に名分下に定り禍亂起らす和平樂む可き義風を存し萬民一心四海一家忠孝一致敎れは隨ひ卒れは附き令すれは行れ禁すれは止の仁俗を保て今日に至りし者て御座ひ舛去れは我々先祖傳來今日の我身に至る迄春は勾へる花を眺め秋は照れる紅葉を賞す

るは愚か寒暖時に隨て衣服を新たにし飲食を擅にするより喫茶笑語皆此の神恩に依らさるはなしと云も敢て誣言では無ひので御ざい舛以下次編の出るを俟て

◎母の恩

二人の心を修めいよ何に彼の事も現れる、と是は御神樂歌の四下目にある　神の御言葉で有舛、二人とは夫婦の事なりと承る成る程此の世の地と天とを形象りて夫婦を拵へ來るでなとある如く、夫は天なれば妻は地である天地和合せすんは世界か治らむ、云迄もなく晝は日蝕あり夜は月蝕あり其上電光閃き雷鳴動し雨は益を覆すが如く風は萬木を倒して果てしなく地は又洪水汎濫して田園を浸たし家屋を流がし其上地震海嘯となりて尾濃三陸の如くに災害を與へられては如何、實に我々同胞は一日も地球上に生息が出來ませむ、政に何處までも日月晴明天下泰平を願はねば成りませむ、夫婦も亦如斯妻が西向や己や東向く妻が山へ行や己や川へ行くと云位は兎に角に去年も茲年も妾狂ひ昨日も今日も賭博場暴らし明日も明後日も流連と

云夫あれば、去年も茲年も姦夫狂ひ昨日も今日も酒呑廻り母は病床に臥し兒は餓に哭くをも顧さる妻あれは如何、遠く慮りなき者は近に憂ひを招き親子兄弟諸共に寒風凜烈の冬の日も綿の入たる衣服すら着る能はず薦を擔て橋下に月を覩るが如き悲境に沈没するはまだしもの事人に依ては究すれば亂ると強窃盗掏取持逃となり裁判監獄の手數を煩はし重罪輕罪の處分を受け此世からなる阿毘叫喚八寒八熱の地獄に墮ねば成らぬ者となる、故に夫婦は何處迄も心を同し力を共にし緩急相救け御前百迄妾や九十九迄共に白髮の生る迄、で無れは行きませむ、否れば假令信心をすればとて神樣は兎ても御受取は有ませむ、むごい心を打忘れ優ひ心に成りて來いと云ひ給ふに非すや、偖て此御神樂歌は十二通に解釋の仕樣が有ると申しますから二人の心は夫婦と見れば今御話し申通り去れど若し親子二人と見れば如何云迄もなく親が天なれば子が地である天地和合せさる可さるが如く親子も必す和合せねば成りませむ、請少く共理由を陳べむ、畏も上は一天萬乘の君樣より下賤

が伏屋の乙女に至る迄一人として親なしに生れて來た者は有ませい、去れは由し教育は受けす共荷にも人間の名義だに有する者なれば必す親の恩を知らさる者の無き筈で有ませ然に廣ひ世界には親を輕じ蔑にし酷きは實母殺抔の大罪人ゲ時々新聞誌上に見受る事で有ます洵に沙汰の限りで有ませむか、抑も斯樣な者は人間としての情なきのみならず鳥獸の心をも有せさる者なり何と者烏でさへ反哺の孝わり鳩にすら三枝の禮ありと云に非すや、併し斯る事は支那朝鮮の出來事之を此所に御話申すは甚失禮で有ませ依て今婦人兒共衆の爲に聊か母の恩を說て御聞せ申さむ

國常立尊の化身昔印度に於て母の十恩を說く一に謂く懷胎守護恩、私本より婦人に非す、故に懷妊の苦痛は如何なる者か詳に知るに由なけれど其食物進す血色變りつはり痛みを見るに付ても一通りの事では有るまいかと思ふ加之行に疾く走らす徑せす片足せす高き所に手を出さす眼に惡色を見す耳に惡聲を聞す、と云が如き其心遣の切なる事名狀すべからす是を、、、、の恩と云ふ　二に謂く臨產受苦

恩、十ケ月の間は小心翼々として薄氷を踏が如くに胎内の子に障りなき樣身を護り儲て其の産に臨むや四苦八苦七顚八倒空を摑で擡へ苦るしみ眞に生死の境を經て始て子を産み下す是を、、、、恩と云ふ　三に謂く産子忘憂恩、母は如斯難關を趣て漸く子を産み下すや其子は此世の空氣に觸れて始て嗚呼の聞を發す母は之を聞きさても嬉しや御陰で啞にも生まれざりしかと只管神の御恩を喜び其子の安全を祝し自分の苦痛は忘れたる者の如し是を、、、、恩と云ふ　四に謂く乳哺養育恩、乳を以て子を養は上下一般の習慣なれど其富貴の人は自分乳無ければ乳母を置き或は牛乳を以てすと雖貧賤の者に至ては却々乳母は勿論牛乳すら用る能はす去れは乳なき者は止を得す貰ひ乳して以て養育せさる可らす、其れ風荒き晨た雨繁き夕べ啼く兒を抱て人の軒端に貰乳と云も眞に大体の辛抱には非るなり是を、、、恩と云ふ　五に謂く吐甘含苦恩　其子稍生長して三四歳になると漸く食物を嗜む樣になる、人孰か美味を希はざる然に母は自ら苦きを含み甘を以て其子に食はしむ

其愛情の切なる言語の及所に非ず是を、、、、恩と云ふ、六に謂く廻燥就顯恩、雪は深々と降り積り朔風習々と骨を刺して寒き冬の夜に頑是なき嬰兒は不淨を漏して夜具を濡す事多し母は其の濡れたる所に寢ねて燥る所に其子を置く是を、、、、恩と云ふ　七に謂く洗濯不淨恩、凡て嬰兒は寒暑を問はす所撰ばす尿屎を漏して衣服臥具を汚して憚からす然に母は腹も立てす小言も云はず日に幾度と云事なく其不淨を洗濯す是を、、、、恩と云ふ　八に謂く爲造惡業恩、六七才になると云と氣隨氣儘を爲し近所隣の兒共と喧嘩口論しては遂に其親與親の爭となり或は塀越に隣の梨の實がぶら下り居を見認兒共は親にねだりて止す與子と地頭には勝をすと心ならずも之を強取して其子に與ふ之れ正く道德と法律の罪人なり故に、、、、恩と云ふ　九に謂く遠行憶念恩、十二三歳になると住吉道明寺奈良長谷高野、我教徒は大和の本部等へ參詣を爲す後とに殘りし母親は可憐吾子孫一は石に躓きて怪我しはせぬか風に當りはせぬか掏盜に掛りはせぬか、もふ何處迄行きし、もふ何處迄歸り

しと正く歸來て其無事な顔を見ぬ内は安心が出來ぬ者とやら、本に日清戰爭の頃かよ私の親戚某現役にて旅順港迄從軍せり其後とにある家族の心配と云は實に非常な者よして兎ても形容が出來ませむ時は恰も十二月富士山迄行す共隨分雪の見ゆる寒空に夜は次第に更けわたる草木も眠る丑三の頃時計の音はチン、チン、不圖眠を覺せしは妻の於貞唖寒むやと手を伸せど夫とは見へす加賀の千代の其れならで、起て見つ寢て美津根屋の廣さ哉いや待て暫し我が夫武夫は大日本帝國の軍人として支那征伐に行れし若想に今日此頃は旅順港か威海衛灣海灣の湖風に摩天嶺の山嵐し其上雪の中に野陣を張り氷を枕に幻た寢かあー勿体なや氣の毒や妻は温に蒲團を着て何して此儘寢て居らりよと其儘すつくと起上り兼々信仰する天理王の大神に燈明を點し何卒神様よ這般の戰爭は日本の勝利に歸する様、二には何卒我夫武夫は拔群の威勳を現はして芽出度凱旋する様、止を得すむば假令單丸の下に斃るゝ共玄武門に於る原田重吉には劣らぬ様と一心不亂に祈願する折しも表の戸を明て入り來る

者あり、這は何者そと顧れは五十に餘る姑か全身雪に濡れつゝ歸り來る有様、妻は驚き這は母様何故に又何處に行き給ひしと問へは姑は潸然と涙を滴し何故何處へとは开は又何故ぞ本に夫癖は根が他人とやら去にても其許に限ては、、、、知すや近頃島の時聲何となく氣に懸る故若や我子に恙ありてはと二十日の夜より心願込め水垢離を取りて丑の時參り漸く今宵て滿願せり而も今夜は二十六日敎祖様の御命日なれば定て御利益を頂くならむと彼是する内夜はほのぼのと明け渉り地の將に昇らむとする頃電報と一聲高く投込は是れぞ其子の報知にて玉傷を受け一命危かりしも幸ひ全快せりと、其后十日を經て到りし書面には旅順港の戰爭に玉創を受け一時は東西も辨せさりし程なりしも二十六日の夜母上の夢を見不圖目を悟せば傷の痛は忘れたるが如に全癒し居れり全く神様の御救助に依る者ならむ云云嗚呼親の慈悲は斯迄に深き者か之を是れ遠行憶念恩と云ふ　十に謂く究竟憐愍恩、廣大甚深なる母の慈悲は現在一世に止らすして死して後に至る迄愛子の事を思て止すとやら、上

來叙し來る所を母の十恩と名け其概略を辯する已耳若其れ細密なる點に至ては到底一朝一夕の談に非るなり、人は其れ如斯大恩を受たれは男女共十四五歳に至る迄は親子甚親密にして母の手に非れは帶も結ばす母の手に非れは衣服を着す母の手に非れは食事も爲す母と共に行き母と共に座し母と共に寢ね一日片時も母の側を離れさる程に睦き者が十五六に成りて稍春情を催すと漸く母を疎む樣になりて夜歩き茶屋遊を始るに至ては屢母の譴責を受るを以て益々母を疎遠にし嫁を迎へ郎を取れば彌以て父母を輕蔑す嗚呼人情の輕薄なる一に何ぞ茲に到る悲みても亦悲む可き限りにこそ、斯る人非人の輩が其惡業の結果業病難病去ては盜難火難凡ての災難を受るに及でやれ妙見樣神明樣觀音不動毘沙門日天月天八百萬の神と珠數を摺り切り柏手より火を出す共豈に其れ何の功かある依て教祖は無理な願は仕て呉れな一筋心に成りて來い、又たむごい心を打忘れ優ひ心に成りて來い、又二人の心を修めいよ何にかの事もわらわれると仰せられた次第で御座ひます

◎父の恩

先に既に母の恩を説く、依て今席は父の恩を説かねば成らぬ順序で御座ひ舛、兼て御承知の通り天地陰陽と云事は開闢の初より又世界は何處に行きましても變りは無ひので有舛、神書に二靈地に降りて群品の初めとある如く伊弉諾尊伊弉冊尊の二神が日本の山川草木人畜魚類に至る迄御造り遊され猶日月の神樣は本より十柱の天理王大神が夜の守り日の護りに惠み給ひ救け給はればこそ、五日の風十日の雨五穀豊熟萬民快樂春は花夏は橘秋は菊月よ雪よと何不自由なく生計の立つ者よ去れば前席に御話申す母の恩と云も今又御話申す父の恩と云も皆神樣の御守護ある上の事と云事を忘れぬ樣にして貰はねば成らないです、本を忘ての孝行は片輪孝行、片輪孝行は勞して益なしと、教祖は申されましたし、偖て其道理がおわかりになれば次に父の恩を考て貰いたい、母は地なれば父は天である母は陰なれば父は陽である天地陰陽の和合すればこそ柳は緑花は紅の色を呈する者、父母和合すれば

自己の身躰も産れ出でし者、猶母は内に居て會計の整理兒女の養育を爲す代はりに父は寒天と炎天とを問はず星を戴て外に出で月を踏て家に歸り我兒の顔すら碌々知らぬ者もありとかや、赤の他人に平々拜々御尤千萬道理至極と無暗に首を下屈物を捧げ胸に怒を忍て面に笑を作るも皆妻子の身の上を思へばなり、月の晦日年の暮風邪頭痛が根となりて還らぬ旅に赴くも多くは妻子の爲ならずや、其れ斯る恩義あればこそ教育　勅語に爾臣民父母に孝にと詔勅る、世間にも孝は萬善の基と云ひ梵網經には孝順は至道の法なり孝を名て戒とすとあり、去れば御道に八の塵埃を說き佛教に五戒十善を談じ儒に三綱五常を辨ずる皆孝道の外は無ひのである、孟子が學問の要は唯放心を收むるのみと云ひ大般若六百卷空の一字に歸すと云ひ詩經三百十一編思無邪の一句にありと云も溯源して論する時は凡ての學問宗教千作万行は孝の一字に歸すと云も過言では有りますまい併し斯樣な理窟を弁べて居ては際限がなく加之今夕は時刻も更けたれは孝子新六の御話を以て局を結ばん孝は勿論凡て

の善行は人の爲に爲すではなく皆自分の爲すべき事を爲して自分に其德を蒙者なれば敢て人に誇るには及ばない事です、近江の國に安土と云所か有舛新六とて極く貧しき農夫にて九十に餘る老夫に事て最と孝行なりしかは領主の御聞に達し金錢米穀等多く褒美として下賜せらる、或人之を聞き態々新六を尋ね貴殿は如何なる事を爲して這般の如き御褒美に預りしやと問に、最と不審の事に存候　奴元來學なく才なく孝と云は如何なる者か其さへ存不申唯父は老人なれば常に心に逆はぬ樣にと存候ひぬ然るに斯く賞し給はるは甚心得難事に候と答へぬ、其さま毫も虛飾の言とも思れず去るにても不審の事よと去て新六の里人に向ひ其親に事る摸樣を問に曰く、新六の親は常に寺に參詣する事を好めり、寺は去のみ遠からねど九十の翁なれば步行かなはす其れを日毎に竹駕籠に載せて妹と共に昇ぎて心の儘に參詣せしめ、花を觀んとしては駕籠を降し鳥の音を聞かんとしては駕籠を立つる抔暇なき身に出來難事又湯に入る時は妹と共に抱きかゝへて浴せしひる抔是れと云て目立つ程の事は無

れ共永の年月身は貧苦に痛みつゝ終始一日の如くに父を看護する事は常人の及さる所なりと答へしとぞ、實に陰德あれば陽報あるの道理、存生の間は村内の人に可愛がられ領主よりは金穀の賜ものを受け死して後は名を竹箔に乗れて萬人の鑑となる孝も茲に到て誌たりと云べし、折り折に有らばと思ふ涙哉、予の如きは一昨年既に母を死なし今は七十に近き老父のみ、其老父も海上數百里を隔てたる愛媛縣の地にあれば、朝な夕なの仕へも出來す唯雨の晨風の夕べ烏の啼聲に、さては父上の御身に恙なきやと獨り心を惱すのみ、父在さば遠く遊ばすと併し御道の爲なれば致方なき欠何れにしても予は不孝の者よ、幸ひ諸君は両親の許に在れば心のたけを誌されよ木靜ならんとして風止す子養はんとして親在さずの慨をなさらぬ樣呉々も希望し置く

明治卅一年二月十八日印刷
仝　年仝月廿五日發行

定價金拾貳錢

愛媛縣宇摩郡津根村字津根三百四拾番戸
編輯人　眞木宥馨

奈良縣山邊郡丹波市町字三嶋四番地
發行者　木下松太郎

奈良縣山邊郡丹波市町大字石上貳拾九番地
印刷者　澤田義太郎

奈良縣山邊郡、丹波市町大字三島百三拾壹番地
印刷所　三島印刷合資會社

大賣捌　木下書店
仝　今村松聲堂
仝　北田書店
仝　水川書店
仝帶解　井久保書店
仝　木原書店